パリ日本文化会館友の会 ハイライトニュース 2018　No.4
MCJP2018 ― No.4 作成日：Tuesday, July 10, 2018
作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr

プロが撮影した公式の写真を待っていて、若干日数が経ちましたが、今回は６月２１日の「音楽の日」に開催しました日欧アフリカのミュージシャンによるコンサートについて報告します。日仏の共同大型文化事業「ジャポニスム 2018」の開会式がいよいよ７月１２日に行われます。その日以降、ハイライトニュースで取り上げる催しは「ジャポニスム 2018」事業が中心になりますので、本号は会館独自事業として今年最後の報告になると思います。

第２号でも触れましたが、筆者は館長就任以来、日仏・日欧の文化交流だけでなくアフリカやアジアとの文化交流も会館事業の柱に掲げています。今回は１６日と２０日の「あしながおじさん」の映画上映会に続いて、コンサートでも日欧アフリカの交流が実現しました。

「壮朗とバラデ」--日欧アフリカの演奏家による共演

フランスでは夏至の日は「音楽の日」と決められ、街のあちこちでプロやアマのミュージシャンたちが路上演奏会を開く。地下鉄の中はもちろん、駅から家に向かう路上でも４～５カ所で演奏会が開かれ、大勢の人々が取り巻いていろいろなジャンルの音楽を楽しんでいた。そうした演奏会は真夜中過ぎまで続き、街中に音が響きわたることになる。

もちろん文化施設内でも「音楽の日」にちなんで種々の演奏会が開かれるが、弊館では日欧アフリカの演奏家によるコンサート「壮朗とバラデ」を開催した。

ゲストで出演した新倉壮朗さんは幼い頃から音に対する好奇心が強く、８歳の時には既にピアノを即興演奏し、１１歳になるとセネガルのパーカッション楽器「サバール」を演奏し始め、日本在住のアフリカのミュージシャンたちと共演するようになった。今ではピアノ、マリンバ、バラフォン、サバール、ジャンベなどを即興で奏でるほどである。この日も新倉さんは全身を使った抜群のリズム感でダイナミックにいくつかの打楽器を演奏した。

演奏中の日欧アフリカのミュージシャンたち（中央が新倉さん）　撮影　小田光氏

一方の「バラデ」（「木の音」という意味）というグループは何年も前からアフリカの伝統的な音楽や現代音楽と向き合ってきたサキソフォンの奏者・仲野麻紀さんと中近東の弦楽器ウードの奏者ヤン・ピッタールさんが結成したグループである。そこにブルキナファソのバラフォン奏者

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。

ムッサ・ヘマさんとコートジボワールのカマレ・ンゴニ（撥弦楽器）の奏者バシール・サノゴさんが加わり、即興音楽の新境地を開拓し続けている。今回はさらにコントラバスのニコラ・プファイファーさんとドラムのモーガン・コルヌベールさんも参加した。

ヴォーカルとサキソフォンを担当した仲野麻紀さんは、筆者がブルキナファソで初めてお会いした時、既に将来の三大陸音楽家による演奏会の可能性について熱く語っていた。もともとフランスを根拠地としているので、弊館とは以前からいろいろな事業で接点があったが、私の方針をお話しすると、昨年夏にアフリカの音楽家を交えた演奏会を提案いただき、このたびそれが実現したのである。

バラフォンという楽器はマリンバ、ヴィブラフォンなどの木琴のルーツのような楽器で、乾燥した堅い木片の連なりと大小の瓢箪の殻からできた共鳴器からなる。それを奏者は撥(ばち)で叩くのであるが、仲野さんによれば、撥はメロディーを奏でると同時に、シンプルな打撃の反復によって一粒ひと粒の音がリズムを生み、曼陀羅的空間のような複雑な紋様を紡ぎだすのだという。それらの音とリズムがギターやコントラバス、ジャンベ、カマレ・ンゴニ、サキソフォンといった他の楽器による縦横無尽な複数のリズムの参加によって重層的なポリリズムの音の世界を形成する。

その心地よいポリリズムで奏でるオリジナル曲や日本の曲の数々が、まさに私たちの体内に響き、溶け込んで、まるで波間に浮いているような、緑陰のハンモックに揺られているような、そして、ぬくもりのある境地に誘ってくれるような小宇宙を、ホール内に醸し出した。東北大震災で亡くなった人たちを追悼する「大漁唄い込み」では、ヤン・ピタールさんによる大正琴のソロの音色に合わせた仲野麻紀さんの温かみのある低い歌声とそれに調和したアフリカと欧州の演奏者たちのコーラスがその世界観を象徴していたように思う。

楽譜をもとに練習する西洋楽器と楽譜に頼らないアフリカの楽器との共演は、非常に難しいのではないかと思われるが、私たちにそれを感じさせない、音楽の日にふさわしい、自然で、くつろいだ、非常に心地良い音楽会であった。アンケートでも「湧き上がる情感」「素晴らしい発見」「魅力的かつ感動的」「異文化間のハーモニー」「活き活きした演奏」「魅力的で和める」「非常に独創的」「美しいアンサンブル-人間性-歓喜」などの評価が寄せられた。

聴衆の拍手喝采は長い間続き、それが徐々にスタンディング・オベーションへと移って行った。

演奏が終わって聴衆の賞賛の拍手にこたえる演奏者たち　　撮影　筆者

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。